淨瑠璃「れいせい物語」

若月保治

江戸土佐掾の語物道行たるや景事など、所謂段物を集めた「蘭曲後撰集」中に、「しうげん上るり」「呉越の四季」の次に、「十二段草子」の中心たる「笛の段」「たまものだん」「四季の調」「すがたみのだん」「まくらもんどう」の前に、「拍出」と稱する一段が見出される。極めて短い文であるが、それと同文で、同じ「拍出」と稱するものが、家藏の曲節付ある中篇「十二段草子」の、「笛の段」「玉藻の段」「縫物の段」「四季の段」「姿見」をならべた次に載せてあり、更にその次に家藏本には「みやこ廻り」なる短文が並べてある。

この「拍出」なるものが、極めて短文であることからも、原の一曲でないことは明かであるが、その原曲が何であるのか、如何なるものであるか、何時頃のものであるかゞ知りたくて、久しく困つてゐるのであるが、如何にも手懸りが乏しいのである。内容からも、九州者の東下りの意味以外には、何のつかみ所もないのである。所が新發見の大和守日記の寛文十三年九月の記述を見ると、

一、寛文十三年九月二十六日　靈台院お慰に操云付、辰中刻初之、杉山肥前掾、弟左近大夫

○上瑠璃「花山院」……○後「上るり」、初段、笛の段、玉もの段、四季の段……二段、姿見、枕もんだう……三段、れいせい物語と云上るりの内、かしは出、ひとり、都めくり、つれふし……（大和守日記）

といふ文が見出されるのである。ひとりとか、つれふしといふのは、獨吟、合吟といふやうな意味で、前に「花山院」を上演し、後に「上るり」即ち「上るり姫物語」換言すれば十二段草子を上演し、常時の習慣によつて、その三段目を演

じた後にも、普通ならば、歌舞付狂言やおどりなどを演ずるのであるが、此時はそれらを演ずる代りに、「れいせい物語」といふ淨瑠璃の「かしは出」と「都めぐり」の二段を演じたといふのであるが、それによつて、この「拍出」と「都廻り」の二段の原曲名が何であるかは分つたとしても、それが如何なる内容のもので、何時頃のものであるかは未だ明かでない「れいせい」といふと、「十二段草子」即ち「淨瑠璃姫物語」の中に出て來る侍女の名であることからも、十二段と何かの關係がありそうに思はれるが、果して如何なる關係をもつた原曲であるかゞ分らないのである。

何故に私がこの「れいせい物語」を探してゐるかといふと土佐掾の段物集中にも「拍出」があるから、家藏の「拍出」を同綴した曲節付寫本中篇十二段草子は、土佐掾の語物かと思ふと、曲節付を比較して見て、必ずしも、直ちにさうと速斷出來ぬものがあり、從つて原曲「れいせい物語」なり、「拍出」なりの時代が分らず自然家藏曲節付中篇十二段草子の年代を判定することが出來ないから困るのである。若し「拍出」の年代や「れいせい物語」の年代が分りでもすると、それが手懸りとなつて、「中篇十二段草子」が何時頃操芝居として上演されたかも判定することが出來るかも知れず、それが出來ると「十二段草子」の研究に光明がさして來るからであるけれども「拍出」が、寛文十三年に肥前掾によつて語られてゐることは確實であるにしても、「曲節付中篇十二段草子」と殆んど同文の十五段本十二段草子が、寛文元年前に語り物に用ひられてゐることが明かであるから、思ふに私の家藏「曲節付中篇十二段草子」と寛文元年前に語られてをり、操としても上演されたものと見てもよささうである。かりに一歩を讓つて、それが土佐掾の語物であるとしても、寛文中頃には土佐掾が語つたものと見て大誤はなからうと思ふのである。そうしてそれが長篇流布十二段草子と、短篇八段本系十二段草子との間に立つて、連鎖の役をなすものと、私は考へるのであるが、その寫本中篇である曲節付のある十二段草子が、何時頃何人によつて作られたかは一層不明である。或は慶長頃に小野お通によつて作られたといふ十二段草子は、之ではなからうかと私は想像してゐる。かういふ事を知りたくて、私は「拍出」なり「れいせい物語」について、もつともつと知りたいのである。切に大方の示教をまつ次第である。なほ之に關しては拙著「古淨瑠璃の研究」慶長寛文篇中の十二段草子の研究及び、近刊の「近世國劇の研究」參照を希望する。